

# 出 会 以 (24)

—— キリスト教講演会・講話集 ——

2013年度



**桃山学院大学**

キリスト教センター

桃山学院の「キリスト教精神」

## 「自由と愛の精神」

桃山学院の学院章には、“SEQUIMINI ME”（我に従え）という言葉が刻まれています。それはイエスの弟子アンデレがイエスに従ったように、「自由と愛の精神」をもっていきることです。使徒パウロが書いています。「あなた方は、自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」（ガラテヤの信徒の手紙 5 章 13 節）

自由には他者への愛と責任がともないます。「自由」とはひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」は、単にキリスト教の立場だけでなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目標です。

人間のそのような可能性を開花させながら、高い理想をめざしてチャレンジし続けていくこと、それこそが桃山学院の一世紀を超える伝統が目指そうとする「キリスト教精神」であり、「世界の市民」への道なのです。

# 目 次

第2回キリスト教講演会（2013年10月25日 金曜日）

講演テーマ：「どっこい生きてる（？）  
——21世紀日本社会のキリスト教」

講 師：北海道大学名誉教授 土屋 博氏

講演要旨 .....	1～2
講演内容 .....	3～18



# どっこい生きてる (?)

## ——21 世紀日本社会のキリスト教

### 1. はじめに——演題で意図したもの

私の現在の考え方をもたらした三つの時代的背景と「どっこい生きてる」感覚

#### (1) 戦後の「焼け跡世代」

今井 正監督の映画作品「どっこい生きてる」[1951 (昭和 26) 年] のテーマとなった世界

#### (2) 1960 年代末における各種「運動」の挫折とその後

#### (3) 死とセットになった「老い」

### 2. アジア・太平洋戦争後の日本社会

キリスト教や新宗教団に訪れたブームと社会革新運動

「心の癒し」と「パン」の道 (精神主義と現世利益)

### 3. 第二の「戦争」体験

若者の異議申し立て・ヒッピー文化 etc. から安保闘争・学園闘争・教会闘争 etc. へ

学生キリスト教運動の組織とその運命

「いかにあるべきか」 (= 「べき」論) (倫理) の基にある「いかにあるか」 (存在)

#### 4. 発想の転換——キリスト教から「宗教」へ、そして宗教から「宗教文化」へ

「本質」主義の動揺＝不変の理念的本質を想定した「いかにあるべきか」の躓き

絶えざる自己相対化の中で生き抜く可能性

「宗教の中のキリスト教」という、キリスト教会が避けてきた考え方を掘り起こすこと

1960年代以降の学界における宗教概念再考の動き

「宗教とは何か」ではなく、「何が宗教と呼ばれてきたのか」を問うこと

宗教集団のすそ野の広がり（文学・美術・音楽 etc.）を「宗教文化」としてとらえなおす

#### 5. 老人と若者の接点（？）——「キリスト教的なもの」に残された道 高齢社会の底流として広がる「古い」の世界と若者たちの生き方に 共通するもの

古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』講談社、2011年

「ムラムラ（村々）する若者たち」は、小さなコミュニティ内のささやかな相互承認とともに生きていく

既存の概念の境目を越えて、そのはざまに他者と共有できる新たな場を作ることを模索しつつ、成長社会を目指さない成熟した思想を鍛え上げていくこと

教義を持たないユダヤ教とあくまで教義や本質にこだわるキリスト教という対立図式の再検討

[講演内容]

## どっこい生きてる (?)

# ——21 世紀日本社会のキリスト教

土 屋 博

### (1) はじめに——演題で意図したもの

先月私は、遂に「後期高齢者」になりました。今や自らの死について、いよいよ本格的に思いを巡らすときです。この機にあたって、若い学生諸君を相手に、長年アンビヴァレントな関わり方を続けてきたキリスト教について語らなければならないということは、正直なところあまり気の進まないお役目です。キリスト教会の人々が相手であれば、率直に教会批判をぶつけるところから始めるのですが、今日話を聞いていただく皆さんには、そのやり方はふさわしくありません。教会批判は次第にエスカレートし、收拾がつかなくなる恐れがあるからです。したがって本日は、私が今のような立場をとるにいたった背景の一端を説明し、それとの関連で、近現代日本社会の状況分析を試み、今後そこにおけるキリスト教が、否むしろ「宗教」がどうなっていくのかを展望したいと思います。以前この会で、かつての同僚である関根清三氏が講演された記録を読み、多少前向きにこのお役目をお引き受けする気になりました。おそらくどこかでその内容と触れ合うことになるのではないかと思います。まあそこまでいけば、本日の話はある程度役割を果たしたことになるでしょう。

先ほど、私の現在の立場をもたらした背景と言いましたが、今からふりかえると、それを構成してきた生涯のほぼ三つに分けられる時期は、いずれもそれぞれやや異なったニュアンスで、「どっこい生きてる」ようなものだったのではないかと思われるのです。そしてそれは、それぞれの時期の日本社会の一般的な動きとも呼応していたように見えます。今日「歴史認識」という概念は明らかに濫用されており、碌に歴史を知らない人が、歴史認識と言えば何かを言ったつもりになり、この言葉を政治的スローガンとして用いています。しかしこれは本来、なにがしかの個人的体験に基礎をおいた表現ではなく、必ずしも「客観的」であるとは限りません。したがってこれから述べることは、私なりの歴史認識と理解していただいても構いません。

「どっこい生きてる」という題は、私が創作した表現ではなく、1951（昭和26）年に、新星映画という独立プロが、出資者を募集して製作した映画のタイトルです。監督は、アジア・太平洋戦争後に盛んになった左翼映画の旗手今井正です。出演者は河原崎長十郎・飯田蝶子等々でした。ストーリーは、公共職業安定所に集まって日雇いの仕事にありつこうとする貧しい失業者たちを扱ったもので、当時の極貧層に属する人々の生活と闘いを描いています。イタリア映画の影響を受けた作品と言われており、今井正監督の代表作です。私は1938（昭和13）年の生まれであり、この映画ができた時には13歳です。世代論という発想には問題があり、そのまま用いようとは思いませんが、通説によれば、私は「焼け跡世代」に属します。確かに強制疎開を経験しておりますし、B29の空襲も、戦後の闇市も知っています。したがって、映画に描かれたような生活は、東京での私の家庭環境とは異なるとはいえ、こうした社会状況は、少年期の数々の思い出と重



なります。

次に私の生涯の中で「どっこい生きてる」という言葉に出会ったのは、それとはまったく異なったコンテキストにおいてでありました。中学から高校にかけての時代に、私は身近でいろいろと考えなければならぬ諸問題をかかえており、その結果、私の環境にとってはかなり異例な道を、いささか乱暴に選択することになりました。具体的には北海道大学で農学を専攻する道を選び、そこから将来の青写真をも描いたつもりでした。しかしそこにはやはり無理があり、結局文学部へ転部することになりました。そのきっかけは、キリスト教に接触し、北海道大学キリスト教青年会の寮へ入ったことでした。そこで日本全国の学生キリスト教運動、また世界の同種の運動に深く関わることとなりますが、それについては後から述べます。結果的にはこの運動は、1960年代の世界的規模におけるさまざまな若者の運動と連動し、やがて挫折・衰退していきます。私が関わっていた学生キリスト教運動の組織も自己解体を遂げていきました。そのとき、組織のスタッフの一人が、なにがしかの組織上の責任を感じたためか、「どっこい生きてる」という文章を機関紙に書きました。私もそれに半ば同調したため、迂闊にもこの運動の後始末を引き受けることとなります。ここには私の往生際の悪い性格が現れており、それが結局、今日まで続いている私の生涯の基調低音なのではないかと思えます。

三番目の「どっこい生きてる」は、後期高齢者になった私の現在の心境です。第1期の「どっこい生きてる」は、私自身の現実的生活とは直接重ならなかったとはいえ、敗戦という日本社会の未曾有の危機の中から発せられた言語表現ですから、ある種の普遍性を持っており、境遇の違いはあったとしても、誰にとってもそれなりに納得のい

くものでした。それに対して第2期の「どっこい生きてる」は、特定の世代の特定の組織に属したのものにとってのみリアリティーをもつ言語表現でした。しかし見方によっては、この当時の若者たちを中心とする運動の興隆と挫折は、やがて世界的規模で、目に見えない形で浸透していき、いつのまにかひそかに、20世紀末における社会の価値観やものの見方を変えていったのではないかと考えられます。私はここでは一応、そうした作業仮説に基づいて話を進めたいと思います。ところが第3期の「どっこい生きてる」の問題になると、第1期・第2期には明らかであった社会的広がりや、ただちに感じられるというわけにはいきません。ここにはきわめて個人的な問題しかないように見えます。死はすべての人が経験することですから、そこに目を留めた時にもみ普遍的問題になるのでしょうか。しかし現代の日本社会においては、この問題をめぐる状況はもう少し複雑になりつつあります。高齢化にともない、殆どの人が死を老いとセットにして考えざるを得なくなりました。これは、人々がこれまでに経験したことのない深刻な問題を含むことが、次第に明らかになってきました。しかし、問題の形や重みは限りなく個別であるために、この点をめぐる発言は、結局、モノローグと沈黙に終わらざるをえないのかもしれませんが。

私の歩んできた道において、それぞれ全くニュアンスを異にするとはいえ、「どっこい生きてる」という表現を意識した三つの時代は以上の通りです。そこで次に、これら個人的経験を近現代世界の社会的動向と重ね合わせつつ、きわめて主観的なかたちで連続的にとらえかえしてみたいと思います。そのさいに、今日の講演の目的との関係もあって、キリスト教の問題を意図的に絡ませます。しかし私の場合、この絡みは無理しなくてもごく自然に現れてくるでしょう。

## (2) アジア・太平洋戦争後の日本社会

「焼け跡世代」は、聞かれもしないのに戦後の混乱の諸相を繰り返して語り続けて、うっとうしがられてきました。それは聞くものにとっては確かにうっとうしいし、またいずれにせよそのような体験は、言葉で十分に伝えられるような性格の出来事でもありません。私はずっと公立の学校に通っていましたから、いろいろな境遇の同級生と一緒にいました。時間が余ったついでに習字を書いてあげた隣の男の子はとび職の子で、やがて正月のはしご乗りをこなし、町内のボスになりました。また、クラスで話題の女の子は、闇市のはずれにある魚屋さんの娘でした。もちろん極貧に近い家庭の子も何人かいました。そういう子たちを含めて私たちの栄養状態を改善すべく、GHQとアメリカ進駐軍は、ララ物資と称するものを給食として配りました。しかしその一部である「脱脂乳」はあまりにひどくて、空腹なわれわれの喉も通らず、皆は教室の床の隙間にひそかにそれを流し込むことに苦労しました。「キリスト教国アメリカ」に関する私の体験は、そこから始まり、そこから展開していきました。

当時日本のキリスト教は、アメリカ「先進」文明に後押しされる形で空前のブームを迎え、教会には多くの人々が集まりました。正確に言えばこのブームは初めてのことでなく、日本のプロテスタント教会は、すでに明治維新以来、欧米文化導入の先駆けとして成長し、19世紀末には、「十年ならずして我が国は基督教国となるであろう」という発言すら見られました（小崎弘道）。戦後のブームは、継続しなかった前のブームのぶり返しで、やがてまた同じような道をたどります。しかしこの時にはまだ一部で、賀川豊彦が日本の大統領になる

のではないかなどというデマが流れたことを覚えています。

しかし、戦後の日本社会における事実として、量的にも質的にもそれ以上に注目すべき出来事は、多様な新宗教団の出現でした。日本社会ではこれも、幕末期に続く第二のブームです。ここには戦中の宗教政策に対する反動も見られましたが、何よりも時の流れが「新」宗教を求めていました。多くの新宗教団を生み出した社会的動機として、しばしば「貧・病・争」があげられてきました。最近の新宗教例えば「幸福の科学」には、この説明はもはや当てはまらなくなりましたが、戦後の新宗教ブームに関しては、確かにこれが適切な説明となったようです。当時都会へ出てきた貧しく孤独な未組織労働者たちは、新宗教団の強い組織力にひきつけられました。そのためマルクス主義者たちは、新宗教団を労働運動の正しい組織化を妨害するものと見なし、批判を展開しました。日本の新宗教研究はここから出発することになります。

ともかくパンを求めて「どっかい生きてる」人々が流れ込む先は、革命運動か新宗教運動で、そこには何となく反社会的なおいを漂わせながら、その要求に応えるものがありました。ここで注意しておくべきことは、新宗教運動の規模は、キリスト教ブームとは比べものにならないくらい大きかったことです。しかし新宗教運動とキリスト教は、革命運動とは区別されるそれぞれのやり方で、時代の要求に応えていました。当時そこには共通するものがあったのです。それは一方では、生きるための糧はパンだけではなく、心の癒しでなければならぬというおなじみのメッセージですが、他方またそこには、心の癒しだけではだめで、パンも必要だという動機がひそかに含まれていました。キリスト教は建前上「現世利益」を批判し、一種の精神主義に

走りがちですが、欧米先進文明と結びついたキリスト教も実は、無言の中に事実上現世利益を求めていたと思います。私は学齢期であったこともあって、周囲の不安定な雰囲気を感じていましたが、いずれの運動にも自ら飛び込むということはしませんでした。

### (3) 第二の「戦争」体験

私が大学へ入って自ら道を切り開かなければならなくなったとき、時代はまさに 1960 年代の「紛争」の時期にさしかかっていました。「紛争」の内容は多様で、世界的には若者の異議申し立てやヒッピー文化に始まり、日本では安保闘争・学園闘争へと続いていき、キリスト教では教会闘争もありました。私もこの状況においては、いろいろな形でこれらに巻き込まれざるをえませんでした。これは私にとっては、いわば第二の戦争体験でした。しかし 1960 年代の終わりには、いずれの運動も挫折・終息し、社会には、荒れ野に取り残されたような気分がそこはかとなく広がっていきました。その時点で前述のように、「どっこい生きてる」という言語表現が再び私の前に現れたのです。今度は、私もこれを自分のものにせざるをえない立場にありました。日本の学生キリスト教運動に関わった私は、その組織的解体を前にして、OBの責任者として事後処理を委ねられたわけです。そこで道筋は見えませんでした。とりあえず解体に至る過程とその意味を一つ一つ検討することから始めざるをえませんでした。全国から集まった小さな集団でさまざまな試みを積み重ねた結果、「どっこい生きてる」意味が少しずつ形をとり始めました。

7年にわたって組織的責任を一応果たした後に、私個人に立ちかえって考えたことは、一つには組織というものに対する新しいアプローチであり、次にキリスト教の「宗教的」とらえなおしでした。二番目の問題は、時期的にももう少し後になってから浮かび上がってくることになります。そこでまず第一の問題ですが、既存の組織の実態を見ますと、それは多かれ少なかれ何らかの形で設立の動機を引きずっており、現在はそれが見えにくくなっているとしても、ひそかにそれが影響を与えています。そうした動機を否定的に見ず、むしろ意識的に受け取りなおそうとするとき、設立の「精神」とか「…主義」とか称する主張が現れるのです。具体的にはそれが「規約」・「会則」などの表現をとるのが普通でしょう。私が属していたキリスト教組織では、同様なものが「方法論」と呼ばれていました。そこでは結局、いつのまにか「いかにあるべきか」という発想が根底に忍び込んでこざるをえません。1960年代の紛争の積極的遺産は、実にこうした発想法それ自体に対して、根底的な疑問が投げかけられたことにあったのではないかと思います。

先ほど触れた「心の癒し」と「パン」の問題も示唆しているように、「いかにあるべきか」（倫理）は、現に「いかにあるか」（存在）を踏まえずして主張されるときには、空理空論に過ぎなくなります。そう言っても私は、単なるリアリズムの主張をしているつもりはありません。近代の多くの組織は、イデオロギー化した「いかにあるべきか」という観念的思考（「べき」論）にがんじがらめになり、いつのまにか自家中毒を起こして自滅していったように見えます。キリスト教会は体質的に、この種の発想になじみやすい性質を持っています。しかもキリスト教は、「いかにあるべきか」を問うときに、初めから現実に対

するキリスト教の原理的優位を前提としています。人間の生き方についてならまだしも、組織自体の保存の論理としてこれが用いられることも少なくありませんでした。1960年代に日本のキリスト教会が経験したことは、この種の発想に無自覚に固執した結果もたらされたものに対する挑戦だったのではないのでしょうか。その時代にしばしば提起された「キリスト教とマルキシズム」という問題設定にも、旧来の発想のディレンマがはっきりと反映されていると思われます。教会は、社会問題と取り組むにあたって、そこに当然生じざるをえないこの葛藤に耐えきれませんでした。そこを乗り越えて「どっこ生きてる」と言うためには、葛藤の根源を何とかしなければなりません。そうした状況に後押しされて、やがてキリスト教の「宗教」的とらえなおしという問題意識が出てこざるをえないのです。

#### (4) 発想の転換——キリスト教から「宗教」へ、宗教から「宗教文化」へ

「いかにあるべきか」という問いは、本来あるべき理想的・倫理的な「本質」の存在を想定して、どのようにしてそれを実現するかを問うことです。「いかにあるべきか」をもう一度「いかにあるか」へもどすということは、言いかえれば、このような理念的な本質の存在を疑うことに他なりません。20世紀の知的営みが行き着いた先は、従来の本質主義に揺さぶりをかけることでした。キリスト教との関連で言えば、かつて書名としても用いられた「キリスト教の本質」・「ユダヤ教の本質」・「宗教の本質」等々の表現が影をひそめるに至ります。キリスト教が本質としてとらえられるようなものではないとすれば、キ

リスト教的政治・キリスト教的社会等々も、安易に理念化するわけにはいかなくなります。それは、キリスト教的物理学やキリスト教的生物学の理念が、地動説や進化論の前で説得力を失っていったのと同じ運命をたどることになります。20世紀におけるさまざまな「運動」の挫折は、結局、「いかにあるべきか」を問うにあたって、疑うことなく理念の本質を追求した結果に他ならないでしょう。そこで本質主義的発想に代わって現れるのが、そのつど生きている現実に対応しつつも、そこに埋没せずに態度を決めていく小文字の「実践」です。それは、絶えざる自己相対化の中で、それにもかかわらず方向を模索し生き抜いていくことでしょう。今ではもう顧みられなくなった20世紀の実存主義は、こうした動向を無意識のうちに先取りしていたのではないかと思われます。そこでは確かに、「実存は本質に先立つ」（サルトル）と主張されていました。

20世末から21世紀へと移行する時期になると、少なくとも私の中では、キリスト教はもはや何らかの理念的本質ではなく、人間の特殊なふるまい方を示す宗教現象の一環としてとらえなおされるに至ります。しかも時あたかも、私が身を置く宗教学の世界では、既存の「宗教」概念そのものを再検討する試みが、国際的レベルでいくつか現れるようになりました。そうすると、キリスト教を宗教としてとらえ直すということだけでは話が終わらなくなります。従来宗教は、教典—キリスト教であれば聖書—に示された教えとして、あるいはまた、宗教集団—キリスト教であれば教会—として、いずれにせよ、本質を表す実体としてとらえられてきましたが、今やそのような形でのアイデンティティには疑問が投げかけられるようになります。情報の共有が進み、時間的・空間的に広がりをもった宗教現象の多様性が認識され



てくるにつれて、これまで明らかであるように見えたアイデンティティの保持は難しくならざるをえません。そこから宗教現象を一段と広い視野から、歴史的・社会的にそくしてとらえかえす方法が求められることとなります。それが宗教を「宗教文化」として見なおすようになるきっかけでした。スピリチュアリティと呼ばれる諸現象や新しい宗教運動の広がりがこの背景となっていました。今や「宗教とは何か」という問いは意味を失い、「何が宗教とよばれてきたのか」を明らかにしなければならなくなりました。「キリスト教とは何か」という問いも同様に、「何がキリスト教なのか」という問いに道を譲ります。

私は現在、「宗教文化」という概念を用いて、これまで考えてきたキリスト教の問題をとらえなおそうとしていますが、それは、対象（さしあたりキリスト教）から距離を置いた「中立的」・「客観的」立場をとろうとするものではありません。一見傍観者的に見える宗教文化という表現ですが、私はこれをいわば「実存的」にとらえかえそうと考えています。言い換えると、先ほど述べた「いかにあるべきか」から出発しないものの見方、すなわち、非本質主義的なものの見方を、あらゆる面で自分自身の出発点にするということです。宗教的教えも宗教的組織もたえず流動化のさなかにあることを率直に認め、それを正面から受け止めることを、自分の積極的立場として自覚的に選ぶとっていくのです。21世紀になってなおも「どっこい生きてる」と言うためには、この程度の覚悟は必要になるでしょう。高齢になった私にはもう実際に見聞する時間は残されていませんが、21世紀の人間は、旧来の思想・信条をそのままでは保持できなくなったとき、案外こうした方向で新しい自由を獲得していくのではないかと思います。

## (5) 老人と若者の接点(？) —— 「キリスト教的なもの」に残された道

「老い」とは生物学的意味での「どっこい生きてる」であると言えるでしょう。ここでようやく今日の講演の題は、私にとって現在の状況と重なります。老いには、遅かれ早かれあからさまな形で「死」と直面せざるをえない人間の限界状況が現れています。現代の高齢社会では、身近なところで嫌でも目に入るようになった高齢者たちの生態は、どこか頼りなく、目の前の現実的問題をしばしばあまいさに任せているようにも見えます。視力が弱くなり目がかすんでくると、考え方の上でも、物事の輪郭がぼけてきます。それは老いが自然にいきつく先なのですが、中にはそれに満足できず、「いかにあるべきか」に立ち帰ろうともがく老人もあります。しかしそれは所詮無理なことなので、妙な形での短絡をひきおこし、周囲に迷惑をかけます。本質的な枠組みを明確にする発想が次第に消え去り、揺れ動く感覚の波動の中でさまざまな出来事がゆるやかに推移していくというのが老いの世界でしょう。これはいわゆる「ボケ」の症状であり、ひどくなると認知症になります。力が衰えていく高齢者にとっては、それは一種の自衛の姿勢であり、さらに救いにもつながっていきます。しかし今日の日本の高齢社会においては、一見気だるいそのたずまいが、社会全体の底流となってきたようにも見えます。高齢者だけでなく若者たちの生き方にも、いつのまにかこれに通じるスタンスが現れてきているのではないのでしょうか。これは若者の老人化でしょうか、それとも老人の若者化でしょうか。しかしいずれにしてもこの傾向は、実は、先ほどから私の経験を通して見てきたもののとらえ方の時代的推移と

無関係ではないように思われます。

若者たちのこの傾向に私が気付いたのは、最近目立ってメディアへの露出が増えた若い社会学者古市憲寿さんの著書、特に『絶望の国の幸福な若者たち』（講談社、2011年）を読んだときです。古市さんによれば、若者対老人という構図は、もはや言論としても運動としても大きな広がりを持たなくなりました。今日では、若者というカテゴリーはあまりにも拡散し過ぎています。2005年ごろから、「非正規雇用」・「ワーキングプア」・「就活戦線」・「ネットカフェ難民」等々の言葉と結びつけて、「不幸な若者」について語られてきました。しかし調査によると、現在の日本の若者の生活満足度は、この40年間ではほぼ最高の数値を示しています。古市さんの言葉を借りれば、人は将来に希望をなくしたとき、幸せになることができます。若者に広がっているのは、身近な人々とのつきあいや小さな幸せを大事にする価値観です。日本経済の再生も革命も関係ありません。彼らは「ムラムラする若者たち」と呼ばれます。この「ムラムラ」は「村々」と重なります。「村々」を打破してくれるような「非日常」があれば、「ムラムラ」してそれに飛び込んでいきますが、どんな非日常も、やがては日常になっていきます。彼らは、何かを勝ち得て自分を着飾るような時代に見切りをつけて、小さなコミュニティ内のささやかな相互承認とともに生きていくことを選ぶわけです。それは時代に適合した賢明な生き方だと言われていますが、まさにその通りでしょう。

しばらく前までの私の個人的感覚では、現代の老人と若者に共通して現れてきたこうした傾向は、決して喜ばしいものではなく、むしろしばしばいらいらの対象となりました。しかし私もすでに高齢者になっている以上、身の程を知らなければなりません。そのために、こ

れまで見てきたように、20世紀から21世紀にかけての自己と世界の歩みを振り返りながら、どうしてこのような現象が現れてきたのかを考えたわけです。そうすると、その途上に浮かび上がってきたものの考え方の移り変わりの一つ一つは、決して納得のいかないものではなかったことが明らかになってきたのです。「いかにあるべきか」は「いかにあるか」を無視しては意味を持たなかったということ、いきなり「本質」を問うより「現象」を見る方が大切であったこと、今日「キリスト教」は「宗教」として、また「宗教文化」として見直す必要があることなどは、むしろ私が折に触れて積極的に主張してきたことにほかなりません。もし現代の老人と若者に共通する傾向が、時代の推移の中から自然に生まれてきたものであるとすれば、私には、これを拒否する理由はないことになります。それでは、どのようにしたらこれを前向きに受け取りなおすことができるでしょうか。最後に、自分自身の問題とキリスト教、さらにキリスト教会の問題とを連関させて、この問いについて考えてみたいと思います。

高齢者にも若者にも、それぞれのいきさつを経て今日開かれているように見える存在可能性は、積極的な言い方をすれば、既存の概念の境目を越えてそのはざまに、他者と共有できる新たな場を作っていくことではないでしょうか。一見したところでははっきりせず、とりとめない振る舞いは、この可能性を志向する模索と見えなわけでもありません。もちろん高齢者と若者とでは、志向する可能性のもたらす現実の様相は異なります。若者の場合には、身の丈にあったその都度のつながりの形成になるでしょうが、高齢者の場合には、東京巢鴨のとげぬき地蔵に集まる老人たちに象徴的に現れているように、死を前にした老いによる一種の脱力感の共有になっていくのかもしれない

ん。しかしいずれにしてもここには、何が何でもこうしなければなら  
ないというつっぱりは見られなくなります。右上がりの成長にこだわ  
って声を張り上げることは、次第に政治家や企業経営者もしくは経  
済評論家の一人芝居と成り、一般の人々は無言の中に、ほどほどの生  
活をどうにかして維持していればいいという価値観の中で生きてい  
くことになるのではないのでしょうか。こうした「どっこい生きてる」  
姿勢を積極的に受け取りなおすところから、現代世界の成熟した思想  
が開けてくるのではないのでしょうか。

キリスト教特にプロテスタンティズムはその歴史を通じて、罪ある  
人間とこの世を変革しなければならないということをあまりに意識し  
すぎてきたように見えます。宗教社会学者の大村英昭さんは、「鎮める」  
宗教に対してこれを「煽る」宗教と呼びましたが、この見方には当たっ  
ているところがあります。先ほど名前を挙げた古市憲寿さんは、マス  
メディアでは「煽る社会学者」と見られていますが、その見方はあ  
たっていないと思います。確かにネット上では、若者が彼に対する悪  
口を書きこんでおり、それはマスメディアで飯を食っている連中の望  
むところですが、古市さんのねらいは、若者を煽ることなどではない  
でしょう。ユダヤ教は教義を持たない宗教と言われてきました。確か  
にユダヤ教には、正当と異端の論争はありません。律法は教義ではな  
く、日常生活の指針です。キリスト教は何かにつけてユダヤ教を目の  
敵にし、聖書学はいたるところでユダヤ教の限界を指摘してきました。  
しかし今日キリスト教は、もう一度自らの出発点であったユダヤ教か  
ら学びなおすところがないかどうかを問うてみる必要があります。「教  
義」は「べき」論に通じ、「本質」主義に通じます。今日いたるとこ  
ろで、従来築き上げてきた思考の枠組みを再検討し、その外へ向かう

ことが求められています。キリスト教ももう一度自らの枠を出て、「宗教」という場で他者と出会うことが必要なのではないのでしょうか。ここでは実際には、文学・美術・音楽等々の「宗教文化」が出会いの媒体となるでしょう。キリスト教主義教育と呼ばれているものも、その広い文化の地平で改めてとらえなおされる必要があるのです。

## 講師略歴

### 土屋 博 (つちや・ひろし)

1938年、東京生まれ。北海道大学文学部卒、同大学大学院文学研究科博士課程単位取得。博士（文学）。北海道大学教授、北海学園大学教授を経て、現在、北海道大学名誉教授。日本宗教学会、日本基督教学会では、(常務)理事・監事などを歴任。専攻は宗教学、キリスト教学。主な著訳書に『教典になった宗教』（北海道大学出版会、2002年）、『宗教文化論の地平—日本社会におけるキリスト教の可能性』（北海道大学出版会、2013年）、『牧会書簡—テモテへの第一の手紙 テモテへの第二の手紙 テトスへの手紙』（日本基督教団出版局、1990年）、『聖書のなかのマリア—伝承の根底と現代』（教文館、1992年）、(訳書)ブルトマン『神学論文集Ⅰ』（新教出版社、1986年）など。



# 出 会 い

— キリスト教講演会・講和集 (24) —

2014 年 3 月発行

発 行 桃山学院大学キリスト教センター

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3210

印 刷 和泉出版印刷株式会社

〒594-0083 大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL 0725-45-2360 (代)







## 「桃山学院の学院章」

この学院章は、イエス・キリストの最初の弟子である聖アンデレ (St. Andrew) にちなんでデザインされている。「アンデレ・クロス」(X字型の十字架) は、イエスの教えを守り通して殉教したアンデレの偉大なる生涯のシンボルである。「<sup>セクイミニ</sup>ME」(「我に従え」というラテン語) は、アンデレがイエスに出会った時に呼びかけられた言葉である。したがって学院章はアンデレのように最後まで「自由と愛」のキリスト教精神によって生きることを示している。

*St. Andrew's University*